

3名の詩、『詩とファンタジー』に掲載！

東日本大震災（3・11）の被災者が応募する詩の募集が行われ、1年生の29名が応募しました。そのうち、相澤さん、飯泉さん、丹野さんの詩が、『詩とファンタジー』（かまくら春秋）に掲載されました。3名の誌をご紹介しますので、ぜひ一読してください。

飯泉さん 「たったの」（特別賞を受賞）

たったの五分。
前の自分は、何をしていただろう
休み時間中。
ゴロゴロしている。
雑誌を読んでいる。
音楽を聴いている。
何の変わりもしない憂うつな五分。
当たり前の五分。

たったの五分。
たったの五分。
五分でも一瞬に近い。一瞬で無限大に似ている。
たったの―で変わった。
その時私は何をしていた？
休み時間なんて無い
ゴロゴロしている時間も無い
雑誌なんて目にも入らない
音楽なんかボタン押しても聞こえない

たった五分。
今はどうなっているのだろう。
小さな五分でも、大きな何かができている。
そう、それは、みんなの笑顔――

相澤さん 「心のノート」

心にはノートとゴミ箱がある あの日の記録された 『喜び』 私の記録はまた増えた あの日記録してしまった 『悲しみ』 私は破ってゴミ箱に捨てた 毎日毎日 私『ノートとゴミ箱』は 捨てたり書いたりのくり返し もう私のごみ箱は あふれかえっている 今日 私はノートに 『悲しみ』を記録した 捨てないでとってある ちゃんと残っている 忘れてはいけなから記録した 私は悲しみから逃げて	逃げて 逃げて そして気付いた 今度はゴミ箱につまった くしゃくしゃの紙を 読み返していこう 読んで 読んで そして今私は 読んでいる 心のノートの 新しいページに 大切なことを 記録するために
--	--

丹野さん 「未来への光」

がれきの中に立ちつくす そこには家も、思い出も、学校も なにもかもが「がれき」へと変わっていた 大地が震えあがったあの日 私達はなにを思ったのだろう 朝食を食べ 学校へ行き 友達と会う 日常だった日々を思い出すだけで 風船のように心の空気が抜けてゆく がれきの中で立ちつくす なにもかも一瞬でなくなったあの場所に その一本の樹から 一枚葉が落ち 希望の光が芽を吹く 今、私達はなにができるのだろう 今、ここにいるのがどんなに幸せだろう そう考えながら 今日も新しい朝がくる
